

和本
大好き!



編集〇日本近世文学会

2015.7.15

目次

▼刊行にあたって…02

実践記録①小中学生対象 川平敏文（九州大学）
ジュニアくすし字教室のこと…03

実践記録②大学生対象 堀崎俊彦（高知大学）
読むことの始まりにむけて
——和本リテラシーを大学教育のなかで考える…06

実践記録③大学生対象 西澤美仁（上智大学）
古典文学基礎（講読）のことなど…09

実践記録④社会人対象 福田安典（日本女子大学）
和本リテラシーと社会貢献
——輪田米山を例として…12

▼出前授業の実施について…15

▼日本近世文学会の概要…15

▼和リテのひろば…16

▼編集後記…16

あらゆる領域のヒントが詰まっている

古典籍（和本）をどう読み、理解し、活用するか。
和本教育の実践記録を伝える冊子、創刊！

ご自由にお持ちください

刊行にあたって

ここでいう「和本リテラシー」とは、広い意味では、江戸時代末までに書写もしくは刊行された古典籍（和本）をどう読み、理解し、そして活用していくかといった、日本古典籍に関わる総合的な能力を指すものです。と同時に、狭い意味では、いわゆる「くずし字」（変体仮名）の読解能力を指します。

昨今、この種の能力はいつそう衰退の一途を辿っていますが、二十一世紀を迎えて、日本の現状が混迷を深めれば深めるほど、〈古典〉の重要性は増していると見るべきでありましょう。〈古典〉は文学だけではなく、あらゆる領域に存在します。さまざまなヒントが詰め込まれている〈古典〉を存分に理解し吸収するために、今こそ「和本リテラシーの充実を」と願わずにはいられません。

このリーフレットは、「和本リテラシー」の実践記録を集積し発信することで、古典もしくは古典籍を学ぶ方はもちろんのこと、教える立場にある方々にも一つの指針（モデルケース）としていただけるように願って発刊されます。

どうか、小さな動きがやがて日本各地で大きなうねりに発展し、老若男女がみな自力で、〈古典〉の豊かさを存分に享受できる日が来ますように。

二〇一五年七月

日本近世文学会 広報企画委員会

実践記録

1

小中学生対象

ジュニアくずし字教室のいよ

川平敏文（九州大学） KAWAHIRA Toshifumi

二〇一〇年に九州大学に着任して、学生のくずし字読解能力を上げるために、毎週一回、課外授業として「くずし字道場」なる読書会を始めた。特に国文の学生に限定することなく、他学部・他学科（法学、国史学、美学など）の学生や、中国・韓国・アメリカからの留学生も参加してくれている。本年度で五年目になるが、参加人数は、毎年だいたい二〇名前後といったところか。

さて、こうして始めた「道場」であったが、もうひとつ学生のモチベーションを上げるために、自分たちが勉強したくずし字の知識を、小・中学生に教えてみてはどうかと発案した。題して「ジュニアくずし字教室」。これは、中野三敏先生（九州大学名誉教授）が、携帯メールのフォントにくずし字を入れたら、今どきの小・中学生ならば面白がってすぐに使い始めるだ

ろうと、なかば冗談、なかば本気で仰おつしやつていたことがヒントになった（中野先生の「和本リテラシー論」については、『和本のすすめ』（岩波新書、二〇一一年）などを参照いただきたい）。では、どのようにして子どもたちにくずし字を教えるか。対象は小・中学生であるからして、あまり「本気」で教えるのではなく、「楽しかった」という余韻が残る程度のプログラムが現実的だ。私はそのような大枠のみ示して、あとは基本的に近世文学を専攻する大学院生たちに任せて、教材の研究・作成を行ってもらった。彼らの自主性に期待したのである。以下に、当日どのようなプログラムで、どのような内容が行われたかを報告してみたい。

なお、この「ジュニアくずし字教室」は毎年一回、夏休みの恒例行事となり、昨年は第三回目を迎えることができた。以下に記すのは、その最新の回（二〇一四年七月二七日に実施）の模様である。

※

今回の受講生は小学三年生から中学三年生までの、計一七名。広報活動としては、チラシを作って市内の小・中学校に配布し



木版による印刷を実演する大学院生



「謎解きゲーム」を真剣に考える子どもたち

たほか、新聞にもイベント告知をした。

まずは、ご挨拶をかねて、当方が今回のイベントの趣旨を簡単に話す。教室のうしろには保護者も参加しているので、保護者の方にも、くずし字読解能力の大切さを訴える。

次に大学院生による、「昔の本」の話。今回のテーマは、「**本のなりたち**」。彼らは事前に、ある文章（後述）の版下を書き、それを**版木**に彫り付けたものを準備。本番では、その版木に墨を塗り、紙をあてて、バレンで擦る、という工程を実演。刷り上がったものは紛れもない**素人版**ではあったが、子どもたちを感嘆させることしきりであった。

そして、今度はそこにどんな文章が書かれているかを、「**字母表**」（平仮名のくずし方一覧表）をもとに解読してもらう。すると、徐々に子どもたちの顔がほころびはじめる。それもそのはず、そこに刷られた文字は、「ふりはじめた雪ハ、あしあ

と消して」——、そう、昨年大ヒットした「アナ雪」（アナと雪の女王）の歌詞だったのである！

そのあとは、子どもたちと学生がほぼマン・ツーマン体制で、オリジナルの「くずし字ドリル」を使い、三〇分ほど勉強。だいたいが慣れてきたところで、今度は子どもたちに四〜五人ずつのチームになってもらい、「くずし字・謎解きゲーム」に移る。これは、くずし字で書かれた短文を暗号に見立てて、それをチームで協力しながら解読し、どのチームが一番早く正解できるかを競うものである。暗号は、施設内のいろんな場所に隠してあって、それらを次々に読み解いて行かねば正解に辿り着かない。宝探しのように楽しそうである。

そして、最後はメイン・イベント、「オリジナル百人一首カルタ大会」。百人一首とはいっても、流麗に揮毫されたくずし字のカルタをそのまま並べても、子どもたちにはほとんど手が出ないだろう。

そこで参考にしたのが、いわゆる「下の句カルタ」（板カルタ）である。このカルタの特徴は、取り札が紙製ではなく板製で、百人一首の下の句のみが草書体で書かれてあり、かつ最初の二三文字ほどが大字、残りが小字であること。要するに、カルタ取りにおいて最も重要であるところの最初の数文字が、はっきりと、よく見えるように書かれているのである。

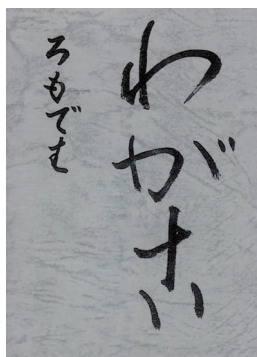
この「下の句カルタ」は、そのむかし北海道の屯田兵たちが無聊をなぐさむべく、独自のカルタ遊びとして発明したもの

という(注参照)。ゆえに本場・北海道では、今も小学生の大会も行われるほど盛んであるらしく、その競技の様子がユー・チューブにアップしてあったりする。そうして鍛錬を積んだ小学生たちは、いつしか草書体の文字というものに目慣れ、親炙してしまふものらしい。

しかし、今回のように初めてくずし字を学ぶ者にとつては、そのようなカルタの文字さえも、なかなか判読するのは難しくろ。となれば、より平易化したものが必要となってくる。たとえば、「わが衣手は露にぬれつつ」という下の句であれば、その書体は、二文字目の「わが」までは行書体程度のくずしにとどめ、三文字目の「こ」だけを「古」の草書体にする、といった具合である。

ただし、すべてがこのようなレベルではなくて、百首のうち何割かは、最初の文字から草書体というような、レベルの高いものも混ぜ込む。とくに中学生用には、その割合を増やすといった、細かな調整も必要になってくる。

とはいえ、実際そのようなオリジナル・カルタを制作するとになると、草書体が書けねば始まらない。このとき、大学で書道部に所属している学生が「道場」の参加者のなかにいたのは、もつけの幸いであった。下はその一部。



「わがころもでは」



「おきま (どはせる)」



くずし字百人一首大会の様様

こうして出来上がったオリジナル百人一首カルタを使って、カルタ大会を実施。あらかじめ、年齢や経験の有無にしたがつて数組のグループに分けていたので、実力もおおむね伯仲し、なかなかの熱戦が繰り広げられた。

以上、第三回ジュニアくずし字教室の報告を終える。

子どもたちがここで得たくずし字の知識は、一週間もすれば忘れてしまふような、はかないものには相違ない。しかしながら、このような経験が将来、彼らの古典愛を育むきっかけとなるならば、それはそれで御の字だと、私は思っている。

(注)

・吉海直人「板かるたの歴史」(『同志社女子大学 日本語日本文学』二五号、二〇一三年)

・「全日本下の句歌留多協会」 <http://www.abauone-net.jp/~skaruta/index.html>

・「HOKKAIDO LKERS」 <http://www.hokkaidolkers.com/articles/2654>

hokkaidolkers.com/articles/2654

読むことの始まりにむけて

——和本リテラシーを大学教育のなかで考える

塩崎俊彦（高知大学） SHIOZAKI Toshiko

二〇一三年度日本近世文学会春季大会「和本リテラシー実践報告」では、くずし字を読む授業の実践例を報告したが、その意図するところは、「和本リテラシーを大学教育のなかでどのように位置づけるか」という点にあった。十分に尽くせなかったところもあるので、その点について触れておきたい。

1 読めない体験としての和本リテラシー

くずし字で書かれたテキストが読めるようになるために、影印本などを使った講読の授業があった。変体仮名や簡単なくずし字がおおむね読めるようになる、それ以上のことは個人の努力にまかされていたようで、誰もが研究会などで苦労しながら読めない文字を解読した経験を持っている。手取り足取り教わるものではなかったと回想される方も多くかもしれない。

こうした経験を振り返ってみると、私たちは、くずし字を通行の字体に直す作業だけをしていたわけではない。自動翻訳ソフトによる怪しい逐語訳のようなものではなく、首尾一貫した意味を含んだテキストを現前させることが求められた。その過程で、わずかに文字が読めないために文意を図りかねて悶々としたり、ある時ふとその文字が読めたときに霧が晴れるように「そうか」と腑に落ちるという経験を何度もしてきた。

活字本によって教育を受けてきた私たちにとって、そこに印刷された文字が読めるのは自明のことであり、読めない文字が読めるようになることを求められる場面は、未知の外国語を学ぶ場合などのように例外的である。日本文学を専攻することになって、くずし字を前にして途方にくれるというのは、相手がどうやら日本語らしいとわかつているだけにけい歯がゆい。

他人による手書きのメモの判読にてこずるといった場面も日常にはよくあることである。かれこれ勘案すれば、目で追えば文字が読めてしまい、しかるべき意味内容を容易にくみ取ることもできるという事態のほうが特殊なことのように思われてくる。「テキストは簡単に読める」というのは私たちの思い込み

に過ぎないのではないか。

和本リテラシーは、そもそも「文字が読めない」というところから出発する。読めない文字を何とか通行の字体になおすことができたとしても、それがふさわしい内容をもったテキストとなるためには、あて推量で特定の文字列を単語と仮定して辞書を参照して、確かにそれが過去に使用された語であることを確認したり、仮名遣いや清濁を判断し、句読点を打つなどしながら意味のある文字の連なりを見出す作業を繰り返す。こうした試行錯誤を重ねるうちに、ようやくテキストのおぼろげな輪郭が見えてくる。私たちは、乏しい知識や経験を総動員して読めない文字と格闘し、なんとかテキストが読めるようになる体験をしてきた。

和本リテラシーは、「テキストは読める」という自明性を足元から覆すような体験であり、読めないテキストをなんとか読もうと抗う機会を与えてくれる。

2 直接経験としての和本リテラシー

なぜこのような体験が貴重であるのか？の前に、和本リテラシーのもう一つの側面について。

和本リテラシーは、書物（和本）はテキストである以前にモノである、という認識から出発できる。和本は、和紙と墨と糸などでできたモノの集積に他ならない。洋装本（西洋紙とインク）もそうなのだが、ふだんあまり接することのない和本を手

にする体験は、書物を意味の総体としてとらえる以前に、モノとしてながめるよい機会となる。

そこで、モノとしての和本を子細に観察してみれば、表紙の文様や書体、版面、料紙の様相、刊記（奥書、識語）や広告、蔵書印など、それぞれに固有の表情のあることがわかる。そうした情報は、その書物がどのように世に受け入れられたかを知る手がかりとなることもあれば、テキストの生成過程そのものであることもあった。和本リテラシーとは、このようにモノとしての書物から、有用な情報を引き出し、血の通ったテキストとして意味づけする体験でもあった。

この体験は、モノとしての書物に手を触れ、その色や形をこの目で確かめながらなされる直接経験である。これに対して、活字本でテキストを読む体験は、遠くの国で起こった出来事をテレビのニュースや新聞記事で知ることような間接経験に似ている。こうした間接経験は、テキストに書かれてある意味ばかりを注視しがちで、情報の素性やどのようなバイアスがかかっているかなどについて糺すことが等閑視されることも多い。

間接経験がこのような問題を孕んでいることを私たちはよく知っているし、情報化社会における間接経験の肥大／直接経験の衰退は、「独力で考え、感じ、自分自身の見解に従って行動すること」から私たちを遠ざけるとも言われる（E. S. リード『経験のための戦い』）。

3 トレーニングとしての和本リテラシー

この点について、文学はいくらか後ろめたい思いをしている。実体のある書物を手に取って読むこと自体は直接経験であるが、読書を通じて得られるものは、テキストの言葉を介して、いまここにはない何ものかを代行する間接経験にほかならないからだ。

しかし、ためらいがちながら、多少なりとも文学が胸を張れるのは、間接経験であるがゆえに読むことが困難であることをよく心得ており、その困難を乗り越えて、いまここにはないものをたしかかな存在感をもって代行する手立てや方法に長けていることによる。ここでいう「手立てや方法」とは、和本リテラシーが提供してくれる「読めない体験」や「モノとしての書物」に接する直接経験によって培われるものである。

文学ばかりが間接経験の陥穽に意識的であると主張するつもりはない。人文科学系の学問は総じてこうした資料に対する基礎的手続きを重んじてきた。だが、間接経験の肥大化に歩調を合わせるように、直接経験の機会、あるいはそれを通して学生が試行錯誤する場面が大学教育の文脈のなかで少なくなっているのではないか、というのが筆者の危惧するところである。

数少ない直接経験の機会である和本リテラシーは、読むことの基礎トレーニングの場として大学教育の中にも位置づけられるのではないか。

4 むすび

一 読むことは、いま眼前にはないものをテキストを介して了解できる間接経験である。

二 和本リテラシーでは、モノとしての書物に向き合う直接経験を通して、間接経験であるために生じる読むことの困難と、それを乗り越えるプロセスを体験できる。

三 文学を学ぶ者は、読むことがどこまでも間接経験であることを知りながら、和本リテラシーというトレーニング直接経験を通じて、間接経験の危うさを冷静に回避し、読むことを確かな手応えを持った直接経験の代行とすることができ

る。

和本リテラシーの効用は、文学研究の場面のみに限られるものではなく、乱脈な間接経験の氾濫に対処するために、より汎用性のあるものであるといえる。文学は実用の役に立たぬ「虚ろな学」であるといったステレオタイプの批判には、和本リテラシーがもたらす直接経験の有用性を説くことで対抗できると考えている。

※拙文のタイトルは、蓮實重彦『『ボヴァリー夫人』論』（筑摩書房、二〇一四年）の序章の章題と同じである。同書で「テキストをめぐるテキスト」として示される内容が、ここでいう間接経験の危うさに重なる。また、和本リテラシーを「直接経験」としてとらえることについては、E. S. リード『経験のための戦い―情報の生態学から社会哲学へ』（原著一九九六年／菅野盾樹訳、新曜社、二〇一〇年）の議論を参照した。

実践記録

3

大学生対象

古典文学基礎（講読）のことなど

西澤美仁（上智大学） NISHIZAWA Yoshinobu

日本近世文学学会春季大会（於東京学芸大学）の前年にあたる二〇一二年の秋、諸事情により急遽、上智大学で西行学会の大会を開催することになり、木越治さん（上智大学）、神作研一さん（国文学研究資料館）に御尽力いただくことになった。その御縁で、会員でもなく和本リテラシーについても素人同然の身ながら、近世文学会で口頭発表させていただいたり、さらには記録を残すことにも協力させていただくこととなった。当日は、やはり上智大学卒業生の塩崎俊彦さん（高知大学）が、カリキュラム改革の提案をなさるといことで、改革の対象になる大学カリキュラムの一例を示すことで、お役に立てればと考えたのである。

キャリアだけは三〇年に及ぶことになったが、ちょうどその前半分を前任校の実践女子大学で「古典文学基礎講読」、後半

分を上智大学で「古典文学基礎」という授業を担当した。どちらも一年生対象の、いわゆる初年次教育の基幹をなす必修授業に位置付けられ、当初は通年で行っていたが、上智では二〇一五年度のカリキュラム改訂によって、半学期になった。

実践の「古典文学基礎講読」は、大学教員になったばかりのころに、長島弘明さん（現東京大学）と竹本幹夫さん（現早稲田大学）と二十代三十代の若い三人で始めた授業で、当時一五〇人定員の一年生を三クラスに分けて、三人で一クラスずつ担当していた。授業の質をそろえるためには、当然何回か打合せが必要になり、それを吞むための口実に使っていたような感じであったが、当初は、「基礎講読」という名前の通り、古典文学の原典を年に五、六作品くらい（文庫本で読めるものを五、六冊といった方が正確で、『源氏物語』も角川文庫一〇冊を一〇年かけて読むつもりで始めたのだが、三年くらいで破綻した）、通年で二八回なり三〇回なりであるから、一冊四週間くらいを目途に通読するためのノート作りを教授する、という授業であった。そのノートを提出させるのではなく、四週目くらいにテストをする。そのペースであるから六作品七作品読める



ところを、一作品分を割^きいて、くずし字を教えた。当時は、一ヶ月くらい集中すれば大体みんな読めるようになった。落第点の学生が半数近くを占めた学年もあったが、毎週のように追試をかけて、大体二セット目くらいの時期からやっていたから、夏休みまでにはあと二作品くらいの余裕があつて、それまでにはほぼ全員合格ラインに到達できたと思われる。通年授業なので、年度末に成績を出せばよく、それまでに多少の出遅れはフォローできたように思う。それが次第に授業の本割^{ほんわり}りで教える時間数が増えていき、そのうち夏休みまでの半学期分をくずし字に費やすようになっていったと記憶する。学生の質が落ちた、というだけでなく、教える側の体力が落ちて、学生の席まで駆け付け、また黒板に駆け戻るということを何度も繰り返すことに耐えられなくなり、時間的にも毎日追試する余裕がなくなつてくると、ついもう一ヶ月もう一週間と延びていった気がする。学生も一気に覚えると一気に忘れてしまうので、卒論のころにはすっかり抜けていて、卒論を書くのに役に立ったという話ばかりあまり聞いていない。

実践女子大学の方で今もなさっているかどうかは知らないが、一五年前に移った上智大学でも、「古典文学基礎」という授業はあつて、やはり一年生対象の必修授業で、その春学期はまるごとくずし字を読むのにあてている。秋学期には春学期履修済みであることを条件にして、写本が版本の影印^{えいいん}をテキストにして授業が行われる。一学年の定員が五〇人から六〇人と少

ないので、一学年一クラスを私はだいたい春学期に担当して、学生はだいたい毎年一割から二割くらい単位を落としてしまう。大学に入って最初の関門なのであるうが、一五年間にひとりだけではあるが、「古典文学基礎」のために卒業を延期する学生もいた。

テキストは三〇年間一貫して笠間書院の『字典^{じけん}かな』を使っている。犬養廉・井上宗雄^{いのうえのむねお}といった大家の監修であるが、残念ながら二カ所大きな誤りがあり、三〇年前に見つけた折に申告したつもりではあったが、ずっとそのままであった。毎年授業の初めに、教科書にも間違いがあるものである、などと話している教師の言葉も鵜呑^{うの}みにするな、と教えることにしてきた。まだ現物は見ていないが、笠間書院は即座に対応して、直後に改訂に乗り出したようである。

自身の学生時代の記憶では、一年生の折に、井浦芳信^{いのうのよしのぶ}先生（東京大学）の近松の授業で、文字との大変な出会いを体験した。夏の期末試験では丸本（浄瑠璃の詞章を一冊に収めた版本^{はんぽん}）を活字体に翻^{ほん}字する。冬は丸本のように書いてみるという試験で、筆と硯を試験場に持ち込んだ学生もいた。しかし書く方が実は簡単で、テキスト通りに復元せよ、ではなくて、丸本のように書いてあればそれでよく、字形は一種類でもかまわなかったからである。それでも何種類も覚えようとしていたり、前の字との関係を考えてみたり、を自発的にするようになる。この話をするたびにみんな笑うけれども、一番効果的な、というか正統的な

教育方法だったのでは、と今では思い返している。私自身は書かせてまではいないが、それでも時折は卒業生から「基礎」の授業の話を書くことがある。大学の国文学科に入って初めて受けた異世界体験の衝撃なのであろうが、卒業する頃になってあるいは卒業して何年も経ってからようやく何かわかってきた気がする、文学から一番遠いところにあるように見えて実は一番根幹的なものだったような漠然とした感覚なのだと思う。

上智大学にも、本年度から「古典文学講読」など「講読」の授業ができた。対象学年も二・四年度と異なるし、留学生を意識したりなど、カリキュラム上の位置付けは同じではないが、主だった古典作品については通読しておくという意識を植え付ける点では共通していて、これと組み合わせて初めて機能する一面があるのは確かであろう。三〇年前の実践女子大にやっと追いついた気がする。

五年間「基礎」を履修し続けた学生は、ノートを持っていなかった。どうやら「書く」ということ自体に抵抗があったようで、それはそれなりの美意識であろうし、世代の問題でもあろうが、読むことは実は書くことなのであって、書いてみて、手を汚して初めて作品や作者が読める、という根本のところ、からだを張った抵抗を見せてくれたのだと思うことにしてみたい。

四〇年前に大学に入ったばかりの学生には、いつも風呂敷包みを抱えた好々爺(こうこうや)にしか見えなかったが、老大家は手ずから国文学への貴重な第一歩を教授してくださっていたのだった。当

時の国立大学は六〇歳が定年だったはずなので、学生はあの時の先生の年齢をすでに通り越してしまっただけで、貴重な体験をさせてもらったことが、ようやく今ごろ少しだけわかってきた気がしたりするのである。

○ 学科科目															
区分		1年次		2年次		3年次		4年次							
		授業科目	単位	授業科目	単位	授業科目	単位	授業科目	単位						
学 科 科 目 (94単位)	必修 (28単位)	古典文学基礎	2	研究法	2	卒業論文Ⅰ(注1) 卒業論文Ⅱ(注2)	1 3								
		近代文学基礎	2												
		国語学基礎	2												
		漢文学基礎	2												
		古典文学概説	2												
		近代文学概説	2												
		国語学概説	2												
		漢文学概説	2												
	選択必修 (34単位)	近代文学史	2			内2 コマ 4単位									
		国語史概説	2												
		漢文学史	2												
		古典文学史A 古典文学史B 古典文学史C 古典文学史D	(注3)				卒業論文を国文学 の分野で作成する 場合	古典文学・近代文学特講科目、古典文学講読(注4) 古典文学・近代文学演習科目(注5) 他に国語学および漢文学より各4単位以上(注6)	6 12 12						
		卒業論文を国語学 の分野で作成する 場合	国語学特講科目、国語学講読 国語学演習科目 他に国文学および漢文学より各4単位以上(注6)							6 12 12					
											卒業論文を漢文学 の分野で作成する 場合	漢文学特講科目、漢文学講読 漢文学演習科目 他に国文学および国語学より各4単位以上(注6)	6 12 12		
														①学科関係科目(基礎科目・文学史・概説科目・研究法、及び同内容の科目の重複履修は認められない)、②課程科目(実習を除く)、③他学部他学科の「学科科目」(外国語科目を除く)で充当することができる。ただし、②と③で充当できるのは18単位までである。	32

(注1) 卒業論文Ⅰの評価・成績はP・Xにより判定される。

(注2) 卒業論文Ⅱは、卒業論文Ⅰを修得していなければ、履修することはいけません(同時履修は認められない)。

(注3) 古典文学史A・B・C・Dについては、教職希望者は4科目すべての履修が望ましい。

(注4) 古典文学・国語学・漢文学講読については、それぞれ2単位までしか卒業に必要な単位として認められない。

(注5) 近代文学の分野で作成する場合は、古典文学演習4単位以上を含むこと。(注6) 演習4単位以上を含むこと。

(注1) 卒業論文Ⅰの評価・成績はP・Xにより判定される。
 (注2) 卒業論文Ⅱは、卒業論文Ⅰを修得していない場合は、履修することはできない(同時履修は認められない)。
 (注3) 古典文学史A・B・C・Dについては、就職希望者は4科目すべての履修が望ましい。
 (注4) 古典文学・国語学・漢文学講読については、それぞれ2単位までしか卒業に必要な単位として認められない。
 (注5) 近代文学の分野で作成する場合は、古典文学演習4単位以上を含むこと。(注6) 演習4単位以上を含むこと。

上智大学国文学科「標準配当表」(2015年度)

和本リテラシーと社会貢献

三輪田米山を例として

福田安典（日本女子大学） FUKUDA Yasunori

1 三輪田米山とは

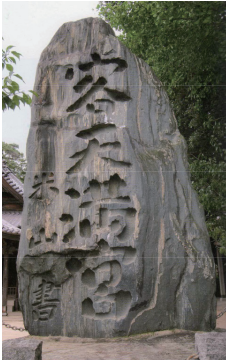
三輪田米山は、文政四年（一八二二）、伊予松山の日尾八幡神社神官の長男として生まれ、明治四十一年（一九〇八）に没した。国文学上の師は大国隆正、弟は三輪田元綱である。祖父は名筆で知られた明月である。

米山は書家として有名で、王羲之を始めとする書の古典に深く学び、独自の書風を確立し、特に愛媛を中心として人気が高い。県内には多くの作品が残されており、日尾八幡神社の注連石（地元では「ちゅうれんいし」とも）「鳥舞魚躍」、伊予豆比古命神社（椿神社）の注連石「龍游鳳舞」をはじめ、約八〇基に及ぶ神社の注連石等石文の揮毫が知られている。また神社の幟にも筆を採り、祭りの折にはあちらこちらで米山の作品が青空にはためいている。

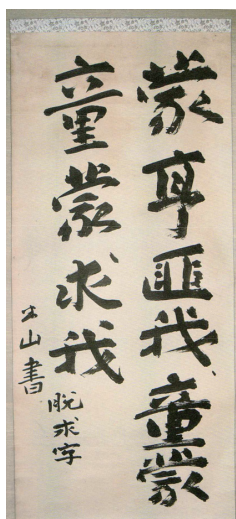
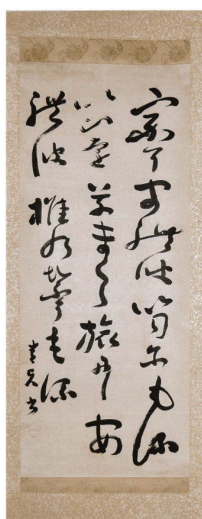
しかしながら、中央に知られることはなく、地方書家として八八歳の生を閉じた。

2 作品

米山の作品はダイナミックな筆致が特徴である。いくつかを挙げてみる（画像は『三輪田米山日記を読む』、三浦和尚・福田安典、創風社、二〇〇一年より）。



米山の書



米山の書

3 米山の発見と顕彰

愛媛のみで知られる米山に着目したのは、佐伯祐三を発掘した山本發次郎であり、ついで浅海蘇山が、『米山人と書』（墨美社、一九六九年）で米山を紹介した。米山の書に興味を持つものが増え、NHK「新日曜美術館」（二〇〇八年）でも取り上げられ、大規模な展示や以下のシンポジウム、関連書目が出版された。研究者だけではなく、むしろ一般を中心に人気が高まったのが、米山研究の大きな特徴である。

※①展示「三輪田米山の書」（二〇一〇～二〇一一年、於愛媛大学ミュージアム）とシンポジウム「米山の魅力を語る」（於愛媛大学グリーンホール）、②展示「米山仮名の美」（二〇一一年一月～二月、於愛媛大学ミュージアム）とシンポジウム「米山石文・幟探訪」（於愛媛大学グリーンホール）など。

また、米山に関心のなかった日本女子大学桜楓会松山支部が、講演（二〇一二年一月、於伊予鉄会館）を企画してく

れた。この折のポスターは手作りである。

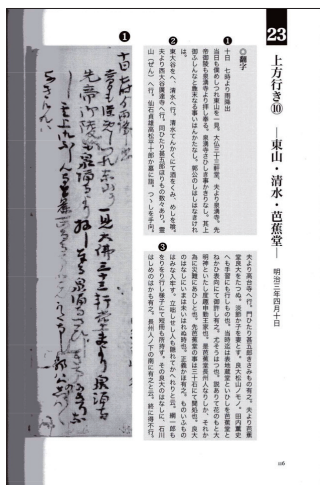
日本女子大学教育文化振興委員会 講師派遣事業
講演
『三輪田米山日記』を読む
福田 安典 氏
日本女子大学 日本文学科教授
受講無料
一冊の方も、是非ご参加ください！
平成24年 11月11日（日）
11:00～12:30（開場 10:30）
いよてつ会館 5F クリスタルホール
松山市大街道3丁目1-1
089-948-3456
問い合わせ先 090-8287-8472 門田
主催：日本女子大学桜楓会松山支部

講演「三輪田米山日記」を読む ポスター

4 米山日記——和本リテラシー——

米山への理解と人気が高まるにつれ、その日記（愛媛大学など所蔵）に関心が集まってきた。これは嘉永元年（一八四八）に家職を継いでから、明治四年八八歳に至るまで書き続けた、総量三〇〇冊で、彼の公用日記であるものの、幕末から明治にかけての松山の世相を記した史料として貴重である。また、和歌、俳諧、国学に関しての記事も豊富である。米山の人気は『米山日記』の共有化に向かう。しかし、『米山日記』は難読であると考え、しかも量が膨大である。どのような形で、大学もしくは研究者が一般社会のニーズに応えることが可能なのであろうかという問題が浮上し、おのずと和本リテラシーと向かい合うこととなった。

まず、ホームページ (<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/BEIZAN/moku02.html>) で画像を公開した。ところがそんなことでは一



『三輪田米山日記を読む』より

般社会と研究者との共有化にはならない。画像が手軽に見られても結局のところは「読めない」と話にならないのである。そこで、その読解の教科書として『三輪田米山日記を読む』を刊行した。これは一般を対象としたもので、見開きで見やすく画像と翻字を載せ、翻字には句読点を付け、さらに読む箇所に適宜①②③というリードを付け、大意、解説、コラムを付けた。おかげさまでこの書は愛媛出版文化賞をいただき、駅や空港の売店でも売られるようになった。大学図書館にはほとんど収蔵されない「ヒット研究書」となったのである。

5 まとめと課題

米山の場合は、資料整備、環境、一般のニーズ、研究者の配置が整っている希有な例である。ゆえに上記のように実践例として「報告」はできる。しかしながら、この一連の活動を通じて果たして和本リテラシー戦略は成功したのか、わかりやすくいえば「くずし字」を読む人口を増やしたのかと問われれば、その答えは「否」である。和本リテラシーの道は険しく長い。それでも日本近世文学会はその途を進まねばならないと思う。

▼出前授業の実施について

日本近世文学会は、和本の読み方・扱い方を学んでいただく一助として、このたび新たに、学会としての「出前授業」を実施します。派遣する講師は学会員です。主として小・中・高校生を対象とし、期日・時間・人数・場所等もご相談に応じます。講師派遣に関わる諸費用は、原則として本学会が負担します。

授業テーマの一例は次の通りです。

- 古典の〈かたち〉——江戸の本を知る・さわる・楽しむ——
 - くずし字で読む百人一首
 - くずし字で読む雨月物語
 - 俳人の書、書の俳句
 - 川柳と絵で読む、江戸の人と暮らし
- ご関心をお持ちの方は、左記まで、気軽にお問い合わせ下さい。

今後の大会案内

二〇一五年度秋季大会

◇期日 二〇一五年十一月七日(土)～九日(月)

◇会場 徳島文理大学 香川キャンパス

*参加費は一〇〇〇円。学会員でなくても事前申込不要で参加できます。

出前授業の問い合わせ先はこちら

広報企画委員会

【E-mail: koho@kinseibungakukai.com】

▼日本近世文学会の概要

日本近世文学会は、一九五一年二月に、江戸時代の文学研究を促進し、その発展に資することを目的として設立されました。現在、通常会員数は八〇〇名(二〇一五年五月二〇日時点)。毎年、春と秋に大会を開催し、年に二回、機関誌「近世文藝」を刊行しています。

研究の推進を図る一方で、近年は、少しずつではありますが社会貢献にも力を入れるようになりました。二〇〇二年には学会創立五〇周年を記念して国際シンポジウムと特別展示「日本をみつけた。——江戸時代の文華——展」(たばこと塩の博物館)を、二〇一四年には機関誌「近世文藝」の百号刊行を記念してパネルディスカッションと「江戸文学まつり」(公開講演会・講談と落語の実演など)を、それぞれ開催しました。また、二〇一一年秋には初めて海外(韓国の高麗大学校)で大会を開催し、かの地の日本近世文学の研究者たちとの交流を深めました。機関誌のリポトリ化もまもなく開始されます。

個人(通常会員、年会費五〇〇〇円)だけでなく、中学・高校あるいは図書館・大学研究室等の公的機関(購読会員、年会費四〇〇〇円)の入会も歓迎します。詳細は左記までお問い合わせ下さい。

入会等の問い合わせ先はこちら

学会事務局 【E-mail: info@kinseibungakukai.com】

(日本大学生物資源科学部 一般教養国語・国文学研究室内代表倉員正江)



▼和リテのひろば

編集後記

◆カリフォルニア大学「和本リテラシー」ワークショップ

卷子本・写本・刊本について、レクチャー・ワークショップ・ディスカッションを実施します。柳井基金（ユニクロ）。

日時：二〇一五年八月三十一日（月）～九月四日（金）

会場：カリフォルニア大学ロサンゼルス校・サンタバーバラ校
講師：小川靖彦（青山学院大学）・海野圭介（国文学研究資料館）・中嶋隆（早稲田大学）

◆国際シンポジウム

日本の古籍の画像データを世界中の日本研究者が利用するための支援方法について、世界各国で「くずし字教育」を実践している方々をお招きして、多角的に検討します。

日時：二〇一六年二月一七日（水）

会場：大阪大学豊中キャンパス

主催：科研・挑戦的萌芽研究「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」（代表 飯倉洋一／大阪大学）

◆小学生向け「和本レクチャー」

鶴見大学では、神奈川県および神奈川県立図書館と連携し、県内の小学五・六年生を主対象とした和本レクチャーを実施します。粘葉装の制作体験などメニューも豊富に用意。

日時：二〇一六年二月～三月頃（未定）

主催：鶴見大学図書館

（窓口は久保木秀夫／文学部ドキュメンテーション学科）

しみまる

和本が大好きな ✕ 妖精。
ヒマさえあれば和本を読んだり
ときには食べてしまうことも。
特技はかけっこ。



▽既に日本物理学会や日本天文学会では「ジュニアセッション」が恒例化していて、中・高生向けに絶好の機会を提供している。翻ってわたくしどもの場合、カルチャーセンターでの社会人教育こそ分厚い蓄積があるもののそれはあくまでも研究者個人の営みであって、学会としての働きかけとなるとまことに乏しい。これを何とかできないか。▽本号には四名の方々に寄稿していただいた。川平稿は御自身の研究室における自主的な活動報告、塩崎稿と西澤稿は二〇一三年度春季大会における「和本リテラシー実践報告」に、福田稿は二〇一四年度春季大会におけるシンポジウムに、それぞれ基つく。▽編集は、広報企画委員会和本リテラシー部門の柳沢昌紀（中京大学／チーフ・飯倉洋一（大阪大学・福田安典（日本女子大学）と黒石陽子（東京学芸大学／副委員長・神作研一（国文学研究資料館／委員長）が担当した。▽本誌（年刊）はひとまず第三号まで紙媒体で刊行し、その後はWEB公開に切り替える。充実した誌面を作れるように、今後は、他の関連学会との連携や協働も視野に入れる。このささやかな試みに、関係各位の叱咤と意見そして情報を寄せられたい。

（神作研一）

『和本リテラシーニュース』vol.1

発行：2015.7.15 編集：日本近世文学会

公式HP ● <http://www.kinseibungakukai.com/>

印刷所：笠間書院 デザイン：笠間書院 西内友美